

## ビジョン連携推進会議第三分科会 第3回 開催概要

日 時	平成 27 年 1 月 21 日 (水)
テーマ	官民連携による観光ルートづくり
臨時構成員	美しい多摩川フォーラム

### 議事要旨

#### ○ 美しい多摩川フォーラム設立の経緯

- ・ 美しい多摩川フォーラム(以下「多摩川フォーラム」という。)は、多摩川水系の流域周辺地域の住民、事業者、NPO、大学、行政等が連携・協働して、経済、環境、教育文化の3つの分野から、地域活性化に向けた様々な取組を展開するプラットフォームである。
- ・ 多摩川フォーラムは、青梅信用金庫の提唱に基づき、平成 19 年 7 月に発足した団体である。
  - ① 西多摩地域周辺は、人口減少、地域経済の低迷、地域コミュニティの活力低下などの傾向が見られ、今後、地域の衰退が懸念される。
  - ② 人口減少時代における地域経済の活性化の鍵は(1)「交流人口の増加」であり、そのためには、「広域連携・協働推進(相互扶助)」が不可欠である。
  - ③ 「広域連携」を可能にするためには、(1)運営主体が「行政との連携」を取り付けること、(2)河川(「多摩川」という共通の地域資源(「コモンズ」))をシンボル化することを通して、「流域の各自治体と市民、事業者をつなぐこと」が条件となる。
  - ④ 信用金庫は、「地域と運命共同体」であり中立的な立場であることから、こうした運動のリード役として適任である。しかし、広域に渡る多種多様な主体の参加を可能にするためには、運営主体は完全非営利であることが望ましく、金融インフラである信用金庫が最適とはいえない。そこで、運動を起こすためには、新たに完全非営利の任意団体を設置する必要がある。

#### ○ 美しい多摩川フォーラムの仕組み

- ・ 多摩川フォーラムでは、経済、環境、教育文化の3つの部会を設け、参加者が事業を提案し、関係者で議論し、合意形成を図っていく。その後、運営委員会、総会において決定され、参加者の連携・協働により実践される。民間主導で、スピード感を持った事業展開が可能である。
- ・ 多摩川フォーラムには、趣旨に賛同する者であれば自由に参加することができる。官民間問わず多種多様な参加者が知恵を出し合って議論し、事業化する際にはそれぞれの立場で関わっていくため、事業内容に広がりのあるプラットフォームとして機能している。

#### ○ 多摩川夢の桜街道

- ・ 「多摩川夢の桜街道」は、多摩川フォーラムのシンボリックなプランである。
- ・ 「桜」の名所は、多摩川の上流から下流まで満遍なく点在しており、種類や開花期間に差があることから、多摩川流域全域を通して1か月程度にわたって楽しむことができる。  
さらに、「桜」も「多摩川」と同じく、「誰からも共感が得られる資源(「コモンズ」)」であり、活用に当たって商標登録等のコストを必要としないものである。
- ・ そこで、多摩川流域の桜の名所を、「桜の札所・八十八ヵ所」としてネットワーク化し、「多摩川夢の桜街道」として観光ブランド化することで、多摩川流域の回遊を目指すこととした。

- ・ 上述の内容が、多摩川フォーラム経済部会での議論、総会の決定を経て、平成 20 年 3 月に「多摩川夢の桜街道」として策定された。本プランでは、これまでに、携帯マップの作成、鉄道会社によるハイキングコースの企画、旅行会社による定期観光プランの実施などが事業化されている。
- ・ さらに、本プランの発展形として、新酒の季節である「秋の紅葉」と西多摩地域に点在する「酒蔵」を結びつけた「多摩川酒蔵街道」を、平成 26 年 9 月から始めている。

#### ○ 事業スキームの展開（東北・夢の桜街道）

- ・ 多摩川フォーラムでは、東日本大震災からの復興支援に向けて、「多摩川夢の桜街道」のスキームを応用した「東北・夢の桜街道運動」の活動を、平成 23 年 10 月から開始した。
- ・ この運動の推進体制として、多摩川フォーラムが母体となって「東北・夢の桜街道推進協議会」を設立した。協議会は、東北 6 県、東京都をはじめとする行政、公共交通機関、観光関連企業、信用金庫団体などから構成されており、官民一体となって広域連携、協働を進めている。
- ・ 「東北・夢の桜街道」ではインバウンド誘客事業にも取り組み、平成 26 年 2 月から 3 月にかけては、観光庁の事業の一環として台湾の地下鉄で車体広告などの PR 活動を行った。

#### ○ 全体を通しての意見

- ・ 民間事業者の参加を持続・拡大するためには、「CSR(企業の社会的責任)」のみに依存するのではなく、「CSV(共通価値の創造)」というコンセプトに立った、社会的課題の解決と企業の利益が両立できるような協働の仕組みが必要になってくる。
- ・ 多くの場合、地域振興は、その地域や土地が有する地域性・独自性を軸に展開されている。しかし、この方法では、経済活性化の効果は極めて限定的なものとなり、かつ、常にイベントを開催したり、目新しさをアピールしていかないと、継続した賑わいの創出が困難となる。
- ・ 一方、多摩川フォーラムでは、こうした方法とは逆の発想で、「川」や「桜」など普遍的に存在する資源をつなげることにより、交流人口の増加を促し、地域の面的な再生を図っていくことに取り組んでいる。このように、「誰からも共感が得られる既存資源（「コモンズ」）」を活用するスキームであるため、他地域でも応用が可能である。
- ・ フォーラムの運営やプロジェクトの成功に必要な要素は、リーダーシップを発揮できる「人」の存在である。緩やかな連携の中で参加者の合意形成を図るためには、会議の場で参加者から意見をうまく引き出したり、運営を上手に仕切ることができる人材がいるとよい。
- ・ 多摩川フォーラムと行政との関わり方は、分野によって異なってくる。観光では、行政主導よりも民間主導による方がうまく進むという印象を受けるが、環境や教育文化では、行政の関わりが活動の前面に出ることで、住民の理解が得られやすく、プロジェクトがうまく進む。
- ・ 現状では、自治体ごとに活動に対して温度差があるのが実態である。例えば、自治体の担当者が異動する際に十分な引継ぎがなされておらず、後任者に改めて説明することがある一方で、全庁を挙げて多摩川フォーラムの活動に協力している自治体もある。「緩い連携」が多摩川フォーラムの持ち味なので、各自治体には、関心のある分野に参加してもらえればよいと考えている。
- ・ 多摩川フォーラムの活動が地域の商店街の活性化につながっている地域もあり、今後、多摩川フォーラムと多摩地域の商工業者、農業者等との関わりがさらに広がるとよい。
- ・ 会員が多摩川フォーラムへ参加することを通して、参加者間の連携のパイプが構築されていく。こうしたことから、本フォーラムの活動は、多摩川フォーラムの活用に限定されない「多種多様な団体による主体的な連携」の素地づくりにもつながっていると見える。